

アンドレアス・カルカヴィツアス

「悪霊」

橋 孝司 訳
國立臺中科技大學應用日語系 助理教授

昨年十月の頃だったか、わたしは狩りに出た。雨が降った後で地面は柔らかく、ふかふかの新しい絨毯にのめり込む心地がした。秋の最初の息吹がすでに訪れ、木々の葉は黄色く染まり、ちよつとした風にも身を任せて姿を消し始めた。ブドウ畑は一面枯れていた。あたかも萎びた美女のように甘い汁の実が失なわれた今では、畑を見に来るものなど誰もいなかった。ブドウの汁は樽の中で熟成し、聖デイミトリスの日に杯に注がれ、酒飲みの中

乾いた唇にしばらく垂れるのを待っていた。

わたしは随分とよろついて火薬を浪費した挙句、正午には疲れ果て、澄んだ流れのそばに立つポプラの木の下に腰を下ろした。袋からパンとチーズを少し取り出し、犬たちにも分け前を投げてやり、残りをむしゃむしゃとつめ込んだ。それからポプラの陰に寝そべり、麦わら帽を顔に載せて眠ろうとした。

しかし、眠る運命にはなかったようだ。眠りの前兆である半睡の状態に囚われるとすぐに、犬たちがひどく吠え始めたのである。頭を起こすと、肩に銃を担いだ巡査^{アウフゼッセル}がやって来るのが見えた。黒い記事章のついた帽子で彼と分かった。

「元氣か？」近づいてきて地面に銃を下ろしながら彼は言った。

「久しぶりだね」

「何か仕留めたかの？」

「いや。さっぱりだよ」

「煙草あるかの？ おとといから村に行っておらんので、煙草が恋しくてな」

「あるよ、ほら」私はそう言つて煙草の紙を差し出した。「紙はいらん。煙を愉しむんでな」。煙草紙の節約のた

めにたいていの村人が使う小さくて薄い玉蜀黍の葉を見た。

煙草を渡してやると、彼はそれを巻いた。ところが、ときおり目を上げては好奇心と不安のこもった目で私を見ている。「ほら座つて」とわたし。「どうして突つ立つたまま日射しを我慢してるんだい？」

「いいや！」と微笑みながらわたしに言う。「その木のとこに人は座らねえ」

「なんで？」

答える代わりに手を伸ばし、木の根元を指した。ポブラの幹の周囲の土が掘り返され、その上には錆びた斧が突き立てられていた。根元には穴が四つ掘られ、それぞれの中には四本の太くて大きな杭が刺さっていた。私は向き直り、理解できないという風に巡査を見つめた。

「あつちで話してやろう」彼は答えた。わたしは起き上がると小さな藁葺き小屋までついて行つた。そこで次のような話を聞かされたのである。

あんたら、学のある人たちは自分たちにや何でもお見通しだと思つとるんだろうが、失礼だがね、何ひとつ知つちやおらん。学問を修めたところで、命を守れなきや

何の役に立つかね？

農夫のほうがあんたよりよく知つてるよ。たとえばだ、クルミやクリの木には深い陰があるが、その下には行つちやならねえ。ひどい目に遭つた者がどれほどいることか！ 目覚めるとものに憑かれておかしくなったり、話せなくなったり、足が曲がらなくなったりつて具合だ。

しかしまあ、それはたいしたこつちやない。季節がもたらすもの年中は訪れず（「一瞬で起きる事は長く、は続かない」の意の諺）、つて言うしな。

それよりもわしが言いたいのはだ、あんたが寝そべつてた木、あれにや霊が憑りついてるつてこつた。杭と斧を見たらうが。十年前に悪魔祓い師が、まこと哀れなアンドニスに憑いた悪霊をそこに封じ込めた……愛のせいだ不幸なあの子は行つちまつた。まあ、なんという子だつたらう！ 黄金の心だよ！ ほんのわずかの誤魔化しもしやせん。日曜にや花嫁のように市場を歩き、毎日は大のように働いてな。惨めな妹たちが何とかやりくりできるように、つてだ。親父は病気がちで、具合のいい時などなかった。一家の誰もが、がつがつとアンドニスに頼り切つておつた。

だが、いいかね。貧乏人にやそれぞれの運命あり、だ。

あんなに苦勞してたのに、まだ足りないってのか、恋心などにまで目覺めてしまった。それが誰に惚れたかつて言うのだな、自分に釣り合った相手じゃなかった。金持ちで、教養も美貌もある娘だった。それによそ者だったよ。わしは、なんというか、よそ者が受け入れられん。教養があるってのと、そういう相手に出会うつてのは別の話だ。

「檻樓であつても地元の靴」って言うだろ。

それとは別にだ、娘は思わせぶりな子だった。いいかね、相手が金持ちの男ってだけじゃ足りないのを承知しとった。わしら貧乏人ならお互いを大事にするもんだがの。

「名前を汚すより目をくりぬかれる方がまし」ってこつた。

アンドニスは美しかった。じつに美しい若者じゃった。ちつとばかり教養もあり、教会で伝道の話をしたこともあった。あつちでもこつちでも愛されたもんだよ。

わしらの村じゃこんな風だ。若い働き手は、初めて仕事で得た金で服を仕立てる。その後は気にしないで、全部家に入れる。神父だろうが、靴屋だろうが、穴掘り人夫だろうがな。

アンドニスもそうだった。が、あとはちよいとやり過ぎた。祭りだろうが平日だろうが気にしやせん。さぼっちゃ、のらくら、とうに稼ぎは入れなくなった。家の者は腹を空かせ始めた。

「息子や、どうして仕事をしないんだね」哀れな母親は訊いたもんだ。

「仕事がないんだよ」うつむきながら彼は答えた。

そうして出かけていくんだが、見る者はみな、どれだけ恥を忍んでそんなことを口にするんだろうかと感じたね。ああ！「愛に掴まれし者まことに哀れなり。鳥の心はつねに粟にあり」（「は自分の利益に、
の耳目を注ぐの意」）、だな。

しばらくして、アンドニスの恋の相手はフロシニという若い娘であることが村中に知れ渡った。知ってるだろうが、世間が咎めるのはもちろん恋じゃなくて、貧困のほうだ。金持ちは何をしてもうまくいく。「貧乏人のクルミは雷鳴のように轟くが、金持ちの無花果は聞こえない、ということだ」（本来の語は「自分のクルミは暗めば聞かれるが、他人の無花果は聞こえない」で、「自分自身の失敗や欠点のほうは容易に知られる」意）。貧乏人は情を持つな、惚れちゃなんねえって言わんばかりよの！

誰もが少年に言った。「届かぬところに手を伸ばすな」。母親はその話を聞き衝撃を受けた。病気がちの哀れな

老母は何時間も身動きできなかった。息子がフロシニを娶るのを望まなかったというんじゃない。盲人なら一つの目でもありがたいだろ。幸せを望まぬ者などいやせん。そうこじやなくて、土台無理な話だったし、息子を取られるんじゃないか、って感じたんだよ。「あの子は道を踏み外しちゃった！」首を振りながら言ったもんだ。

「何て災いにひっかかったんだろ、お前。考えるのはおよし。憑りつかれたら終わりだよ。あの娘はあたしたち貧乏人にや合わない」。

巢を高くかけるなら、枝はたわむ、
鳥は飛び去って、残るは痛みだけ。

しかし、アンドニスは見ようともしなかった。
た。

「愛してくれてるんだ」

そう言いながら、希望を抱き続けた。

しばらく時が過ぎた。フロシニは年頃になった。十七歳の乙女だ。

このわしらの村じゃ、何かが起きると最初に気づくの

は女たちだ。日中は仕事場で、夜は夜で中庭に座ってたがいに噂話にふける。

「ヤネナさん、聞いた？ これこれの誰かさんと誰かさんが……」

「ほんと、なんて運のいい！」

「そうそう。でも、あたしやなんてばち当たりな性根だろうかね。だけどねえ、前かららんでたんだよ。言っただろ……それにね、いいかい、他の話もあるんだよ。よくお聞き」

「神様、お守りください、なんてことになったのかしら！」

そして頬をつねり合うふりをするのだった。

こうして、しばらくするうち、フロシニがバトラの商人の嫁になることが伝わった。

アンドニスはそれを知り、「嘘だ！」と言ったが、そりやそうだろう。娘はまだ思わせぶりな様子だったんだから。

じきに婚約となった。このあたりの婚約のやり方は知っておるだろ。夜二、三人の者が男と神父に連れられて女側の家に出かけ、指輪を交換すりや終わりだ。

それを聞いてアンドニスは信じられるわけがない。愛

は人を狂わせるということだ。

しばらくして正念場になった。花婿がやってきて婚礼は日曜日と決まった。

それ以来娘はアンドニスに振り向くのをやめた。彼を目にすると背を向けた……ああ、女ほど信頼できないものはない。今日はあなたのために死ぬわ、で次の日にや知らんぷりと来る。どこかでお会いしましたっけ、とな。

アンドニスは心優しい子じやった。何も言わない。それどころか花冠に口づけしようと、花嫁の父といっしょに教会へ行ったくらいだ……わしは向かいの席に座って見ていたが、硫黄かと思うほど顔色がくすみ、唇は渴き切って震えていた。ゆっくりと近づいて花冠に接吻してから、戻って柱に寄りかかった。ハンカチを取り出して唇にあてたが、血が滲んでいた。

そのときわしには分かったんじやよ。

「若者には酷いことよ！」そう思ったわい。

アンドニスが家に帰ると母親が隅で泣いているのを見た……まさしく毒蛇に噛まれたようだった。

「落ち着いて母さん。泣かないで」言いながら老母を慰

めた。「そういう運命なんだよ。わかってる。ぼくはいつだって運がないんだ」

そして仕事に没頭した。瓦を焼く釜が燃え盛る季節だった。釜に入っては金を稼いだ。十ドラクマの賃金が手に入った。

哀れな母親は喜びでとび上がった。

あの子は死んでしまった、もう忘れよう、などと口にしとったんでいう。神様は憐れんでくださった、となったもんだ。

しかし喜びはそれほど続かなかった。一週間ほどアンドニスは仕事に励んだが、その後釜仕事をやめ、あちこち村の外れをうろついては、いつも木陰に入り込んだ。

ほどなくして数日家に帰らないことがあった。母親は訝しんだ。

「あの子、どうしちまったんだろう？」

母親は嘆き通しで、仕事仲間をつかまえ、道行く人にも尋ねた。行かない場所、訊かない相手などありはしなかった。足は歩き疲れてぐらぐらになり、服は茨でぼろになった。

ようやく、息子が溝の中で子犬のように泣き声を上げているのを見つけ、連れ帰った。しかし、どうして姿を

消し、また現れたものか。誰もが氣に当てられたと思つた。オリブの木の下で昼寝をしていたのを見た、という者もいた。オリブの木には深い陰があるからな。

老母は神の手にすがつた。燈火を捧げ懇願した。聖母の前で跪いた。しかし、息子は悪くなる一方だつた。皆は日曜ごとに教会へ連れて行き、憔悴した彼を王門の前に横たえた。息子は聖体が出てくる時まで獣のように身じろぎもせずに座っていたが、中から神父の「扉を……扉を！」の聲が聞こえるや、なにやら荒々しい声を発し、教会の硝子窓はギシギシときしみ、聖画には汗が流れた。聖画に汗とあつて、人々はそのことばに震えあがつた。なにか冒瀆的で忌まわしいものが教会の聖なる場所を汚し、長老たちの顔にも汚辱をなすりつけた。

誰がそんな場を抑え助けることができただろう？ 少年は綱を切り、鎖を鳴り響かせて、氣絶したまま床に倒れてたもんだ。

皆は何度もその様を目にし、イマム・チャウシ（イリアリアスから北東の町、現在のケンドロネネ）へ悪魔祓いを呼びにやつた。

「体に悪霊がいる」、少年を見るやいなや悪魔祓い師は告げた。

悪霊という奴はだな、聞いたことがあるだろうが、これくらい、ちっちゃな悪魔だ。卓が置かれるところ、喧嘩やカード博打が行われるところに現れる。もしまたま、誰かが飲んだり欠伸をしたりする時に他人に罵れると、その中に入り込み、血を啜る……

だから、いいかね、罵り声を耳にしたら……笑つてはいかん。はつきりとは知らんよ。なんでもないかもしれんが。あんたもそうしたほうがいい。用心するのは悪くはなからう。

少年は悪魔祓い師の目に出逢うと、声を沈めて落ち着いた。いわば救い手を見つけたということだな。

悪魔祓い師は十人ほどの者に、銃を手にして近くに寄るように言った。

わしらはアンドニスと戸口を共にする仲よ。何よりも神様と隣人。まず仰ぐべきはお天道様より隣人、つて言うだろうが。

わしは銃を取り、悪魔祓い師に命じられた通り、左手で弾を込めてから近寄つた。しばらくしてわしらは村から出た。先頭を少年が子羊のように静かに歩き、杭と斧

を手にした悪魔祓い師が後に続く。その後ろはわしらだ。
「あそこだ！ 撃て！」一本の木を見て悪魔祓い師がわしらに言う。何も見えないが怯えながらも目くらめつばう「バン！ バン！」と撃ちまくって木を蜂の巣にした。「しくじった」と悪魔祓い師。「あつちだ。向こうへ行く……」

追跡が始まった。前に少年を連れられた彼が、間には野原と葡萄干し場を挟んで、喘ぎながらわしらに走る。木を見るたびに悪魔祓い師は号令をかけ、弾を撃ち込んでいった。「バン！ バン！」

呪われたこいつには苦しみられたわい。わしらは聖サナシスからアリカニオテイカ、カタラヒ、カツアペイカと走り回ったが、仕留められない。

「悪霊を撃つのは至難の業だ」悪魔祓い師の言う通りじやった。

話は端折るが、わしらはポブラまで来た。あんたが横になっていたところだ。見ての通り、ここらにはあれ以上大きな木はない。

「皆止まれ！」悪魔祓い師が言う。「ここに隠れているはずだ。他に行くところはない。銃の準備を。合図をし

たら撃て」

命令の通りわしらは「バン！ バン！」すると、少年が叫び声を上げた「あうあうあう！」

悪霊を仕留めたのだ。だが、やつぱりじや、わしらも罰を受けたよ！ ある者の銃は破裂し、ある者は血塗れになった。このわしは何者かに喉元をつかまれ、押されて頭から溝に落ちたらしい。

しかし、悪魔祓い師は悪霊を木に封じ込めた。突然焼けた硫黄のような臭いがして、ぞつとする奇妙な笑いと木の葉擦れが聞こえた。頭上で野鴨の群れが飛び立つかのようじやった。そのとき最後の一発が撃たれ、悪魔祓い師はもつとも恐ろしい呪文を唱えた。

「奴は消え去った。封じ込めたよ」と言った。

そして農夫たちが近づかないように、目印として斧を突き立てた。

わしらはそれから少年を起こしに行った。地面に倒れ真っ青になって硬直していた。起こして手で抱え上げると、家に連れ帰って床に寝かせてやった。

可哀相な少年！ 起き上がることはなかった。

悪魔祓い師の登場が遅すぎたな。身中に巣くった悪霊はすべての血を吸い取っていたんじや。

数日後少年は亡くなった。

【解説】

ここに訳出したのは、十九世紀末から二十世紀初めにかけて活躍した作家アンドレアス・カルカヴィツアス *Ἀνδρέας Καρκαβίτσας* (一八六五—一九二二) の短編『悪霊』 *Zoúdio* である。最後の短編集『背囊の物語』 *Διηγήματα τοῦ πούδιου* (一九二二、死後出版) に収録されている。『背囊の物語』は十四作を収めるが、一八八〇年代後半から一九〇〇年までに発表された作品を再録したものであり、『悪霊』も最初は一八八五年に雑誌『エヴドマス』に掲載された。

カルカヴィツアスはペロポネソス半島北西部のイリヤ県レヘナに生まれた。一八八三年アテネ大医学部に入学。その後九十年からメソロンギで医師として勤務。九十一年からは四年間民間船の船医として働いた。九十六年陸軍軍医となり、翌年にはクレタ革命支援にも赴いた。一九〇九年テッサリアで軍役、その間にスキアソス島でパディアマンデイスに会っている。一九一〇年、イオ

ン・ドラグミスやロレンツォス・マヴィリスなどと「教育協会」を創設した。一九二〇年軍医大将にまで上り詰める。一九二二年結核で没。生涯独身で、作品収入は国家文書庫に遺した。

文学を志向したのは早く、すでに八十五年代半ばからパラマスやクセノプロスらと知りあつて、雑誌『エヴドマス』、『エクレクタ・ミシストリマタ』、新聞『カシメリニ』、『アクロポリス』などに投稿している。村落や船員の生活をリアルに描く『風俗小説』を数多く発表した。ヴィジイノス、パディアマンデイスに続く『新アテネ派』の代表的な散文作家に数えられる。

長編には『華奢な女』 (*Η Ανεργή*, 一八八九)、『乞食』 (*Ο Ήρμάνος*, 一八九六)、『考古学者』 (*Ο αρχαιολόγος*, 一九〇三)、『アルマトロス』 (*Ο αμματολόγος*, 一九〇六) がある。特に『乞食』はギリシヤに自然主義を導入した作品として重要である。短編集はもともと雑誌・新聞に掲載した作品をまとめたものであるが、『短篇集』 (*Διηγήματα*, 一八九二)、代表作『舢先のことば』 (*Λόγια της πλώρης*, 一八九九)、『かつての愛』 (*Παλιές αγάπες*, 一九〇〇) があり、さらに『我が若武者たちの物語』

(*Antiphrasta gia ta pailkipia mas*, 一九二二)、『背囊の物語』(一九二二)とが死後出版された。

もともとは純正語で執筆していたが、一八九〇年から民衆語に転じた。以前の作品を民衆語で書き直したりもしている。そのため、初期発表の『短篇集』や初期作品を雑誌から再録した『我が若武者たちの物語』、『背囊の物語』には純正語作品が入っている。

カルカヴィツァスはリアリズムの作家、『自然主義』の導入者とされるが、この「悪霊」は超自然の存在が正面に現れるホラー作品で、少し意外な気もする。ただし、『背囊の物語』を通して読んでみると、超自然に触れた幻想的な作品がそれほど多いわけではない。

簡単に見ておくと、「魔法の箱」(*To magikéno kouti*)はブズギの音色でひとりで踊り出す不思議な人形の話だが、最後に秘密を割っている。「カリカンジャロスたち」(*Oi kalikantzaroi*)では、クリスマスからテオファニア祭の十二日間地上に現れて悪さをする悪鬼たちが実在のものとして主人公と対峙するが、その筆致はユーモラスである。舞台を空想から借りた作品もあるが(アレスの宮殿の「慈しみの軍神」(*Apis pithaneporos*)や天

国が舞台の「怠け者の聖者」(*Akoulitis ágiος*)、¹「エヴァ」(*Eva*)、²諷刺やユーモアの狙いが強い。「フランガヴィラ教会」(*Frangavla*)は妖精と美を競ったために攫われた姉とそれを救う妹、というお伽話を骨格とする。が、他の作品でもよく試みているように、人物の細かな心理を描きこんでくことが眼目である。

幻想味を含むこういった作品よりも、精彩に富むと感じるのは、やはり、村の大人や子供のふるまいを見つめ、その欲望や姑息な胸算用をリアルに炙り出すことで悲喜劇に仕立てた「雲」(*To synepo*)、³「鶏盗み」(*O ksefokotis*)、⁴「クルドケファロス」(*O kouðokéfalos*)、⁵「希望にあふれる者たち」(*Eufanós*)などである。中でも巻頭に置かれた「ジャック」(*O Jáck*)では、同時代のロンドンを震撼させた切り裂き魔の噂がギリシャにまで伝わって恐怖を引き起こし、ある母親が婚期の愛娘の身を心配する狂騒ぶりの描写が秀逸である。

こういう風に、「悪霊」の持つ超自然的存在のモチーフは、『背囊の物語』の中ではむしろ限られている。他の短篇集には、船を襲う悪霊 *tsálonia* や蘇る死者 *Brakólakas* が登場する作品もあるのだが、それらも、村や海の生活の多様な側面を描き上げるために作家が収集

した素材の一部をなすに過ぎない、ということなのだろう。

なお、「悪霊」の原題 *foûdio* は *foûon* 「動物」に指小辞のついた *foûlion* に由来する。元々は「小さな動物」の意であったが、転じて「悪霊、悪鬼」(=*stouzeio*)を指すようになった。作中に登場する「悪魔祓い師(エクソシスト)」は *foûdiaphs* と呼ばれる。

カルカヴィツアス作品の和訳としては、『舳先のことば』所収の「ゴルゴーナ」(*Η γοργόνα*, 一八九五)を東千尋氏が訳しておられる(『エーゲ海学会誌』十三号、一九九九年十月)。また、同じ短篇集の「船の正義」(*Η δικαιοσύνη της θάλασσας*, 一八九四)は道家忠道訳『アテネの歌声——現代ギリシャ小説集』(一九六六、新日本出版社)の中に収められている。

アンソロジーによく採られる怪作「黒珊瑚」(*Το γιοδούρι*, 一八九四)については、「悪霊」の簡単な解釈と合わせて、拙論「現代ギリシャ幻想小説序説——後ビザンツ期から十九世紀末まで」で紹介しておいた(『プロレリア』二十三号、二〇一七年)。

作家の晩年に小学四年生の国語教科書用として書き下ろされた短編「母の墓」(*Το μνημα της μάνας*, 一九一九)に関しては拙論『ギリシャの中学校国語教科書の通時的分析』への補遺——『親しき動物たち』の章(『プロレリア』二十六号、二〇二〇年)参照。

本稿の翻訳の底本には *Διηγήματα του γυαλιού*, 1973, Eortia (επιμ. Στρώου Κοκκίνη) を使用した。